『ベートーヴェンの生涯』を聴く……

《悲愴》から《ディアベリ変奏曲》へ

2010年6月13日(日) 13時30分開演

津田ホール

［主催］―知と文明のフォーラム

［後援］―(社)全日本ピアノ指導者協会　(財)日独協会

―フォニックス・プロモート　(株)平凡社

［協力］―楽友会フロイデ

青木やよひ追悼レクチャー&コンサート

『ベートーヴェンの生涯』を聴く……北沢方邦

◉ベートーヴェンほど先入観に染めあげられた作曲家は少ないだろう。
気難しい英雄的音楽家といった人間像だけではなく、
そうした偏見にもとづく演奏様式が会場にあるいはCDに溢れている。
生涯も作品も研究されつくしている、という偏見も根強い。
だがはたしてそうだろうか。

◉百年以上も謎とされてきた「不滅の恋人」問題を解決し、ドイツ語圏でも
高く評価されている青木やよひによれば、いわゆる権威ある伝記や研究書にも
いまだに誤りが多いし、なによりもそうした先入観を
無意識の前提とするため、事実の脈絡や解釈を取り違えている。
つまりベートーヴェンの生涯にわたる内面の成長や動きがまったく
伝わってこないし、それがいかに深く作品に反映しているか語られていないという。

◉逆に白紙から出発し、彼の内面の軌跡を事実を手がかりに
辿っていけば、おのずからベートーヴェンの生き生きとした人間像と、
その奥深い表現としての諸作品の本質や様式が浮かびあがってくるともいう。

◉その成果が『ベートーヴェンの生涯』(平凡社新書)であるだろう。
出版を目前に著者は死去したが、青木やよひを追悼するとともに、
そこに提示された新しいベートーヴェン像を呼び起こすにふさわしい
レクチャー・コンサートがこの〈『ベートーヴェンの生涯』を聴く〉である。

◉ベートーヴェンとの出会いによって作曲を志したという
世界的な作曲家西村朗氏と、これも現代作品の演奏で世界的名声をもつ
ピアニスト高橋アキ氏を迎え、初期を代表するピアノ・ソナタ《悲愴》と、
事実上の最後のピアノ作品《ディアベリのワルツの主題による三三の変奏曲》を
軸として、ベートーヴェンにまつわる先入観の暗雲を吹き払うさわやかな
レクチャー・コンサートを繰りひろげたい。

プログラム

プログラム❶【鼎談】
『ベートーヴェンの生涯』をめぐって
北沢方邦・西村朗・高橋アキ

プログラム❷【演奏】
ベートーヴェン
《ピアノ・ソナタ第八番〈悲愴〉》
作品一三
［ピアノ］…**高橋アキ**

―休憩―

プログラム❸【対談】
ベートーヴェンの後期作品をめぐって
北沢方邦・西村朗

プログラム❹【演奏】
ベートーヴェン
《ディアベリのワルツの主題による
三三の変奏曲》作品一二〇
［ピアノ］…**高橋アキ**

出演者プロフィール

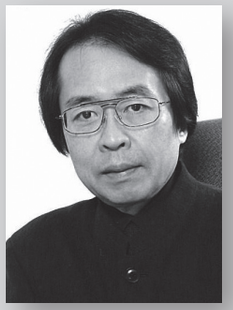
高橋アキ たかはしあき

東京藝術大学卒業、同大学院修了。日本を代表するピアニスト。特に現代作品演奏では世界的に高い評価を得ている。

近年の活動は、二〇〇二年から開始された〈ピアノ・ドラマティック〉シリーズの成果により、〇三年に第二回中島健蔵賞を受賞。〇六年秋のニューヨークでのフェルドマン作品によるリサイタルは、ニューヨーク・タイムズ紙で〇六年度のベスト・コンサートの一つに選ばれた。CDとしてリリースした《シューベルト・ピアノソナタ集》と「モートン・フェルドマン・トリオ」コンサートの演奏で、平成一九年度(第五八回)芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。CD《危険な夜 高橋アキ・プレイズ・ジョン・ケージ》が平成二〇年度文化庁芸術祭優秀賞受賞。

ベートーヴェンとの関わりは、一九七七年、ボンでのベートーヴェン百五十年祭に招かれベートーヴェンとメシアンを演奏、好評を得る。青木やよひの『遥かなる恋人に――ベートーヴェン・愛の軌跡』出版記念会(九一年)では作品一〇九のピアノ・ソナタを演奏する。青木はまた《ディアベリ変奏曲》を高橋の演奏で聴くことを強く希望していたが、それは高橋にとっても念願のことであり、今回のコンサートは二人の意思の幸運な出会いから実現した。

西村朗 にしむらあきら



大阪市に生まれる。東京藝術大学卒業、同大学院修了。現代日本の作曲界を牽引する作曲家。エリザベート国際音楽コンクール作曲部門大賞やルイジ・ダルッラピッコラ作曲賞を受賞するなど、海外でも高い評価を得ている。

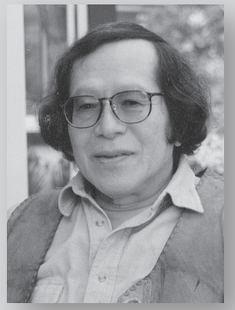
近年の受賞は、エクソンモービル音楽賞(二〇〇一年)、第三回別宮賞(〇二年)、第三六回(〇四年度)サントリー音楽賞、第四七回毎日芸術賞(〇五年)等。〇二年度芸術祭大賞に《アルディッティSQ プレイズ西村朗(西村朗作品集5)》が、〇五年度芸術祭優秀賞に《メタモルフォーシス・西村朗室内交響曲》が選ばれる。

作曲家を志したのはベートーヴェンとの出会いによる。また、青木やよひが現世で聴いた最後の音楽は、西村の作品《プンダリーカ(白蓮)》(〇九年作曲)であった。

現在東京音楽大学教授、いずみシンフォニエッタ大阪の音楽監督。〇三年よりNHK―FM「現代の音楽」の解説を六年間行い、〇九年より同教育テレビ「N響アワー」の司会を務める。

(写真―©東京オペラシティ／撮影大窪道治)

北沢方邦 きたざわまさくに



音楽社会学、科学認識論、構造人類学専攻。桐朋学園大学教授、信州大学教授、神戸芸術工科大学・同大学院教授を経て、現在信州大学名誉教授。

音楽社会学の著書に『メタファーとしての音』(新芸術社)、『北沢方邦　音楽入門』(平凡社)など。科学認識論関係の著書に『知と宇宙の波動』(平凡社)、『近代科学の終焉』(藤原書店)など。構造人類学関係の著書に『天と海からの使信』(朝日出版社)、『日本神話のコスモロジー』『歳時記のコスモロジー』『古事記の宇宙論』(いずれも平凡社)、『感性としての日本思想』(藤原書店)など。

青木やよひの五十五年に及ぶつれあい。二〇〇六年より二人して「知と文明のフォーラム」を主宰する。ベートーヴェンの音楽には近代社会や文明の限界を超える力があるとして、高く評価している。

時代を先駆けた感性の人
——青木やよひの生涯……北沢方邦

◉時代を先駆けるものはつねに孤独である。青木やよひも例外ではない。

◉昔、若い有力な執筆者たちを囲い込もうと、丸山真男や辻清明や日高六郎などを連ねてみすず書房が結成した「柊会（ひいらぎ）」という会があり、定期的に会合を開いていた。世話係の青木についた仇名が、「柊会のカッサンドラ」である。あまりにも鋭い直観と感性で、しばしば預言的な言辞を発したがために彼らがつけたものである。

◉その鋭さは終生変わらない。だがこの鋭い思考力を研ぎ澄ますまでは、多彩な経験を積んだ。東京薬科専門学校（現大学）在席中からの演劇活動が卒業後もつづき、芥川比呂志や荒木道子らの「麦の会」にしばらく所属していた。だがいわゆる新劇に飽き足らず、映画界の門も叩き、映画シナリオにも筆を染め、演劇やオペラの演出家をも志したようだ。演劇については、のちにジャン・ルイ・バローの演出によるクローデル『クリストフ・コロン』やトレヴァー・ナン演出のシェイクスピア『冬物語』、あるいはピーター・ブルークの『マハーバーラタ』に感動したとき、日本の演劇に決定的に欠けていたものを自覚し、そこに長いあいだかかわらなかったのは正しい選択であったと述懐していた。

◉結局その鋭さは、文筆で発揮されることになった。しかし、往々にして観念が先行しがちな文筆活動でも、彼女のなかで先行するのは直観と感性であり、他者の言辞でも身体的に納得できないものは、たとえどのように理論的に手の込んだ言説であろうとも、観念やイデオロギーでしかないとしていた。

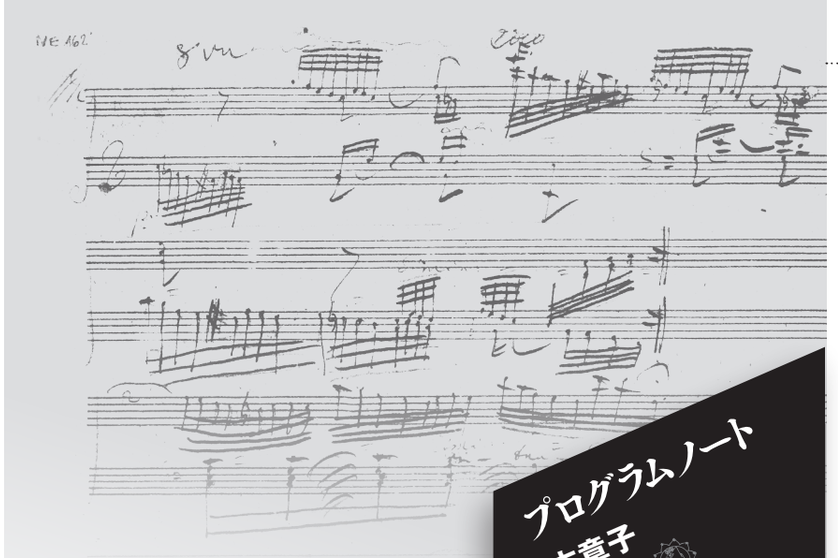
◉一九七一年のアメリカ旅行は、この点で自信をもつ大きな転機となったと思われる。ひとつはフェミニズムとの批判的遭遇であり、ひとつは当時進行中の若者たちの「文化革命」との新鮮な出会い、そしてそれに深くかかわるホピやナバホとの出会いであった。前者は彼女にとって大きな刺激ではあったが、その一部の急進的で合理主義的な傾向には大きな疑問を感じ、まったく異なった文化をもつ日本のフェミニズムはどうあるべきか、深く考える契機となった。むしろそれに関連してはいたが、後者は「未開」や東洋の再発見であり、近代の合理主義やその文明の限界を展望するうえで、はかりしれない影響を受けたようだ。

◉帰国後彼女は、日本のフェミニズムの一翼をになう執筆活動と運動を開始したが、感性や身体性に基礎を置くそのエコロジカル・フェミニズムは、アメリカ流の急進的フェミニズムや左翼フェミニズムの総攻撃を受けることになる。それらに親近感をもつ女性記者たちのお蔭ですべてのメディアは青木批判を展開する。八〇年代の終わりには、もはやメディアには執筆の場もなくなる。とりわけ近代批判を開始し、それを超える文明を提唱する彼女の言説は、有力メディアのタブーに触れたとしか思えない。

◉それに代わり、ベートーヴェンがあらゆる意味で救いとなる。すでに五九年にその「不滅の恋人」問題で画期的な新説を発表していたが、六〇年代・七〇年代にも優れた芸術家たちのフェミニスト批評的な読みなおしをはじめていた彼女は、フェミニズム論争から解放され、ベートーヴェン研究に専念することができるようになった。九四年、ドイツで行われた国際シンポジウムで彼女は、ある著名なドイツのフェミニストに、いまごろなぜベートーヴェンなの？と問いかけられ、憮然としていたが、ベートーヴェンこそ現在でも模範とすべきフェミニストであり、自由人であり、その音楽は近代の限界を超えていると説明するのに苦労したようだ。

◉時代に先駆けるものは、生前の非難や黙殺と引き換えに、やがて死後の栄光を手にする。青木やよひの評価は、まさにこれからはじまろうとしている。

——写真撮影＝新井翠翹



プログラムノート
為本章子

ベートーヴェン
ピアノ・ソナタ第八番ハ短調〈悲愴〉作品一三

あまりにも周知のこのソナタについては多くの言を要さない。自筆譜をはじめ第一次資料の大半が紛失されているため、成立の正確な日時は特定されていない。ただし近年のスケッチ等の研究から、一七九七から八年にかけて創作されたというのが定説である。そうすると作品九の弦楽トリオおよび作品一二のヴァイオリン・ソナタのそれぞれ三曲セットと平行して書かれたこととなる。一七九九年秋、ヴィーンのヨーゼフ・エーダー社から、作曲者自身による《大ソナタ　悲愴 Grande Sonate pathétique》なる標題付で出版された。

革命後の動乱が未だ治まらぬヴィーンで、新進気鋭の音楽家としての地位を順調に確立させた時期にあり、古典的な書法で各種のソナタを創作してきた彼が、敢えてこのような標題に感情移入を行なった理由としてまず思いつくのは、その後の一生にわたる熾烈な試練となった〈難聴〉の発病であろう。のちに友人の内科医や牧師にあてた書簡から逆算すると、ちょうど一七九八年の初頭頃その兆候が現れはじめたことになる。フランス語〝pathétique〟は辞典によると「感動的な（苦痛・憐憫・恐怖・悲哀の情をそそるものにいう）」とある。逆境を前向きに受け止め、能動的に立ち向かう姿勢にはじめて「感動」が生ずる原意に、抽象化された作品の本意を重ね合わせたものであろうか。ベートーヴェン自身の手で付された標題は、ピアノ・ソナタではほかに《告別》作品八一aのみである。なお〈難聴〉と当ソナタに関するさらなる記述として、青木やよひ著『ベートーヴェンの生涯』（平凡社）を参照。

第一楽章　ハ短調　グラーヴェC拍子　アレグロ・ディ・モルト・エ・コン・ブリオ　2／2拍子。前半が反復される比較的典型的なソナタ形式。荘重なグラーヴェ主題に含まれるC→D→Esの旋律動機が当楽章の第二主題のひとつおよび展開動機などに活用されるだけでなく、終楽章にも循環的に使用されているのは、注目に値する。第二主題は変ホ短調・変ホ長調の二種あるが、短調のほうはヘ短調で再現されるのが異例といえよう。

第二楽章　変イ長調　アダージョ・カンタビーレ　2／4拍子。短調作品の第二楽章に主調の長三度下の調、つまり下属調の平行調をとるのは、《第五交響曲》、《ピアノ・ソナタ》作品一〇—一（いずれもハ短調！）等、異例ではない。A（a b a）B（c c'）A'（a）＋コーダの三部形式をとる。両端楽章の劇的な悲壮感とは対照的な、ベートーヴェンの指紋が色濃く刻印された至福感にあふれるa主題。中間部のc'部分が当楽章の変イ長調とは増五度（減四度）関係のホ長調に遠隔転調しているのは、きわめて示唆に富む。

第三楽章　ハ短調　ロンド　アレグロ2／2拍子。ABACABA＋コーダのいたって典型的な大ロンド形式。ロンド主題の特徴のひとつである躍動感あふれるA主題と二声対位法ではじまるスタティックなC主題の対比は印象的。

プログラムノート
為本章子

ベートーヴェン ディアベリのワルツによる変奏曲 ハ長調作品一二〇

出版業者かつ作曲家のA・ディアベリは一八一九年頃、ヴィーンおよびその周辺に在住する多数の作曲家に自作のワルツ（譜例②）を主題とした変奏曲を委嘱した。それらをまとめて《祖国芸術家同盟 Vaterländischen Künstlervereins》なる標題のもとに、大規模な変奏曲集を出版する企画であった。ベートーヴェンはもちろんその依頼の筆頭に挙げられた。おりしも《ミサ・ソレムニス》、最後の三大ピアノ・ソナタ、《交響曲第九番》等の大作を手がけていた彼は〈その他多数〉と横並びのこの企画の誘いを、にべもなく断った。また主題のワルツを「靴屋のつぎ皮 Schusterfleck」（伝A・シントラー）と貶していたともいう。

それにもかかわらず最終的な結果は、意外にも変奏様式史における不朽の名作の誕生となったのである。上記の大作群と平行して、彼は「悪魔じみた陶酔状態」にひたりつつ当変奏曲の創作にふけったという。その間の飛躍的な心境の変化は、究極には天才のみの創作上の神秘に属する領域であろう。そして一八二三年六月、《ディアベリのワルツによる三三の変奏曲》作品一二〇として、カッピ&ディアベリ社から単独に初出版されたのである。ちなみに〈その他多数〉の作品群は、《祖国芸術家同盟》第二集として作品一二〇の初版を追うように同社から出版された。ここには五〇人の作曲家が名を連ね、その中には少年リスト、F・シューベルト、チェルニーおよび皇帝ヨゼフII世ら貴顕の作品も掲載されている。

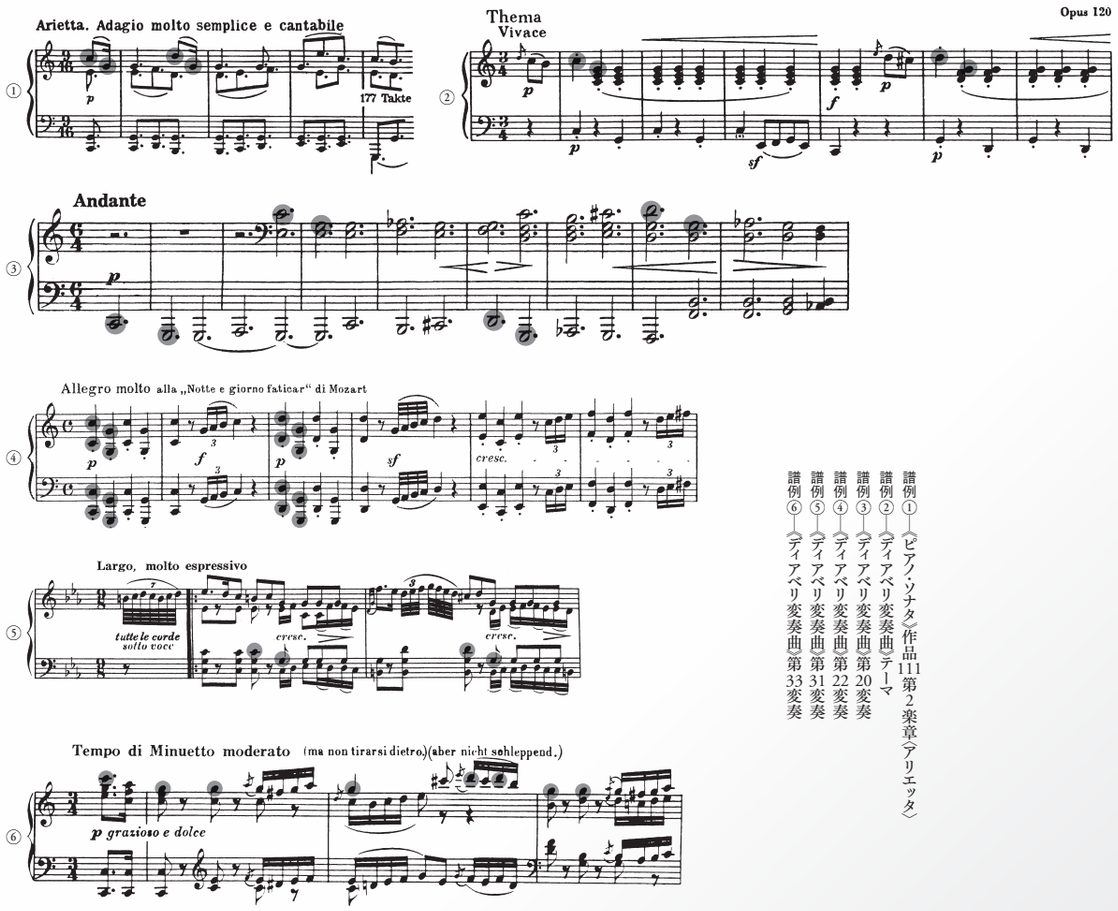
変奏曲における伝統的な主題の扱い、それは主題の輪郭、音楽素材、風貌、印象、性格等が大なり小なり下敷きとなり、各変奏の本質的な底流をなすものといえよう。しかし当変奏曲にとって主題は下敷きとか土台というよりは、そこから発想を無限に拡大、展開、敷衍、飛躍させ、万華鏡のごとく自在に異なる次元へと変質・変容させる単なるきっかけにすぎない。それを象徴するごとくこの作品の標題は、先立つピアノ変奏曲ジャンルの二一の曲集に表記された〝variat(z)ionen〟ではなく、〝Veränderungen〟と銘打たれている（辞典的な意味はいずれも「変化」であるが）。同じく変奏曲で過去にJ・S・バッハのかの《ゴルトベルク変奏曲》が〝Veränderungen〟の表記であったことを思い浮かべると示唆に富む。

第一変奏からして娯楽性の強い通俗的な〈ワルツ〉を拒否するごとく、「荘重な行進曲 Alla Marcia maestoso」C拍子で開始し、最後の第三三変奏を「メヌエットのテンポ Tempo di Menuetto moderato」でしめくくる。全体の三分の一強にあたる一二の変奏がワルツの三拍子ではなく、二拍子系（そのうち九曲がC拍子）をとっている。主題の本質を辛うじて留める各変奏の〈上拍開始〉と〈トニカ終止〉さえ、作品の三分の二あたりから放棄されがちである。舞曲の特性である反復される二元体も、六つの変奏で一元体と化している。

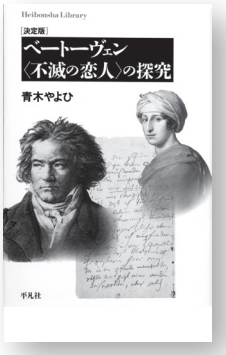
全体をいくつかの区分に分割して展望し、構成的な道筋を把握しようとする試みも学者たちによってなされた。そのなかで合意を得ているのは、第一～一〇変奏を第一区分、第二九変奏以下を最終区分とする分け方である。第一〇変奏が属音および主音の長大なトリルで保続される終止感の強い最初の一元体であることから、大きな段落を形成するとみるのは妥当であろう。第二九変奏以下も、作品全体を総括する凝縮された深遠な境地の集合体として区分されるのは、多くの得心を得られよう。その中間の分割法は学者によって異なり、区分けとしての法則性を見つけ図式化するのは難しく、作曲者の意図に叶うか否かも不明である。

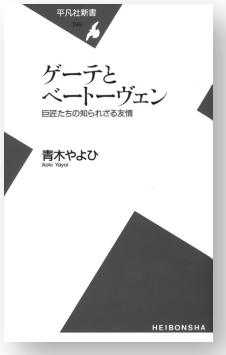
注目すべきは、主題に現れる下降形の旋律動機〈ド→ソ、レ→ソ〉と、前年に完成されたかの《ピアノ・ソナタ》作品一一一の第二楽章の主題〈アリエッタ〉（譜例①）との共通性である。テーマであるから大部分の変奏に種々な形態をとって使用されるのは当然ではあり、モーツァルトのオペラ《ドン・ジョヴァンニ》のアリア「昼も夜も休む間なし」から引用した第二二変奏（譜例④）などは、ユニゾンできわめて顕在的に現れる。しかし作品の要ともいえる第二〇変奏（譜例③）および、この上なく天上的な第三一変奏（譜例⑤）、そして最後の第三三変奏（譜例⑥）ではこの動機を敷衍し、あるいは内声に包み込ませている点は意味深い。あまりにも次元を異にする五つの諸相（譜例①、③―⑥）が、奇しくも同一の動機から発生する奇跡に驚くほかはない。この動機こそ、この曲の披献呈者、アントーニア・ブレンターノへの限りなく昇華された愛の刻印なのである。これに関しては、青木やよひ著『ベートーヴェン〈不滅の恋人〉の探究』（平凡社）他を参照されたい。

しかしこの作品のさまざまな局面、様式、手法等を楽式または和声的・対位法的に分析したり、各部分を形容詞等を駆使した文字に置き換えても、作品の本質の解明にはほど遠い。所詮、言葉の及ばぬ先に音楽があることを実感させるのはまさにこの作品である。



譜例①《ピアノ・ソナタ》作品111第2楽章〈アリエッタ〉
譜例②―ディアベリ変奏曲〈テーマ〉
譜例③―ディアベリ変奏曲第20変奏
譜例④―ディアベリ変奏曲第22変奏
譜例⑤―ディアベリ変奏曲第31変奏
譜例⑥―ディアベリ変奏曲第33変奏





青木やよひの
ベートーヴェン
三部作！

ベートーヴェンの生涯

研究五〇年余のすべてを投入した、著者入魂の遺作。数ある「伝説」はくつがえされ、まったく新しいベートーヴェン像が誕生した。女性を愛し、魚に舌鼓を打ち、カントやインド思想を愛読する、隣人ベートーヴェン—その内面の軌跡と作品との関わりを、手紙・日記・会話帳・友人たちの証言など豊富な資料を駆使して、臨場感豊かに描き出す。

平凡社新書三二〇頁　定価＝九六六円（税込）

決定版 ベートーヴェン〈不滅の恋人〉の探究

ベートーヴェンの死後発見された名宛人不明の一通の手紙。謎に満ちたこの〈不滅の恋人〉への手紙は著者によって完全に解明された。本書はその過程をドラマティックに記述する。

平凡社ライブラリー三二〇頁　定価＝一二六〇円（税込）

ゲーテとベートーヴェン——巨匠たちの知られざる友情

一八一二年夏、二人の巨匠はボヘミアで出会う。ヨーロッパはナポレオンを中心に激しく動いていた。政治的・社会的状況を丹念に踏まえ、全く新しい視点で二人の生涯を追跡する。

平凡社新書二五六頁　定価＝九〇三円（税込）

平凡社　〒一一三—〇〇〇一 東京都文京区白山二—二九—四　電話 〇三—三八一八—〇八七四
ファックス 〇三—三八一八—〇六七四　http://www.heibonsha.co.jp/

ボンのベートーヴェンハウスが《ディアベリ変奏曲》の自筆譜を取得しました

◉

《ディアベリのワルツの主題による33の変奏曲》の自筆譜は、個人が所蔵し売りに出されていたもので、
ベートーヴェンハウスは取得を希望しつつも、資金難のため寄付を募っていました。
青木やよひの遺志もあり、本コンサートでの収益の一部を、この自筆譜購入の目的で
ベートーヴェンハウスに寄付をする予定でいましたが、思いのほか寄付の集まりが早かったようです。
そこで収益の一部は、《ディアベリ変奏曲》自筆譜購入に特定せず、
ベートーヴェン研究のさらなる発展を願って、ベートーヴェンハウスに寄付をすることにいたしました。
皆さまのご協力に感謝申し上げます。

◉

知と文明のフォーラム

［連絡先］—知と文明のフォーラム 東京支部　TEL/FAX 03–5477–2977